

平成 21 年度第 1 回 英語学教育 FD/IT 活用研究委員会 議事概要

- I. 日時：平成 21 年 7 月 18 日(土) 午後 4 時から午後 6 時まで
- II. 場所：アルカディア市ヶ谷（私学会館）
- III. 出席者：山本涼一委員長、田中宏明副委員長、小野隆啓委員、西納春雄委員、
山本英一委員
井端事務局長、森下、恩田
- IV. 検討事項

1. 学士力の詳細設計について
- ◆ 議事進行：委員長より、次の順番で検討したい旨、提案があった。
1. 基礎能力を含めた分野共通英語の学士力、前回の「宿題」を受けて、当面解決すべき課題
 2. コア・カリキュラムのイメージ
 3. 到達度（1、2 が固まった段階で検討を）
 4. 専門英語(ESP について)

とりわけ、本日は「分野共通英語」の基本的な方向性を打ち出したい。以下、各委員からの意見の概要。

- ・まずは、次の 5 つの観点が必要。
1. コミュニケーションを行うこと（能力、スキル）
 2. 他の国の文化を理解する能力
 3. 他の専門英語との関連づけ：情報を得ること、専門分野特有の視点を認識する
 4. みずからの言語や文化への洞察力を養う（メタ言語能力）
 5. 多文化、多言語社会に参加すること：学習の継続、生涯教育、生涯学習
- ・さらに、次の視点からの検討も必要。
1. 生涯学習能力のアップ：自分で調べて、自分でできる能力が最終的に必要
 2. 知識力のアップ：個人差あり、到達目標の設定が必要
 3. 運用力のアップ：Academic English が使えること、TPO にあわせて話せること、客観的な論述能力が必要 cf. California English development test（基準）も参考に
- ・情報教育の目的に沿った形で、次の 3 点を踏まえた検討が望ましい。
1. 外国語としての英語運用能力
 2. 英語に対する科学的理解（メタ認知含む）
 3. 国際情報社会に参画する態度

・充実させるべき領域については、以下の項目に留意。

1. 知識の充実：自分の能力を知る手段が必要
2. スキルの充実
3. 情報収集能力の充実：ネットワークスキルとの関連性
4. 問題解決能力の涵養：発信の際のコラボレーション力が重要
5. 態度の涵養：ライフスタイルの一部として、英語を学習する態度を養うことが必要

・現実に能力を伸ばす方法として以下の指摘あり。

1. 量をこなすことから質を上げていく累積効果の重視
2. 具体的なイメージとして、話題(X)を扱うとき、**Written Stimulus** と **Listening Stimulus** を与え、**Oral/Written** プレゼンテーションへと結びつける

・なお、指摘された観点、項目、方法を重視しつつ、学士課程終了後も生涯にわたって英語を使える人材の育成には、「学習者」から「ユーザー」への視点のシフトも必要。

◆ コミュニケーション能力を中心に

- ・最終的には、中高大接続の観点も必要であり、文科省の指導要領でも外国語を通じて言語や文化への知識を深め、実践的コミュニケーション能力の育成に重点がおかれている。「学士力」の基準を下げることなく、1. 能力の獲得、2. 技能の獲得を規定する必要あり。
- ・コアカリキュラムの作成にあたり、個別の能力・技能を提示する見方と、これを統合する見方の二つがあり、教師側からは両者を統合する見方（＝統合の結果としての「コミュニケーション能力」）の提示が望ましいが、学生にとっては自己省察の基準として個別の提示が分かりやすい。
- ・個別に分割したとき、運用の前提となる知識（cf. 3000語のメンタルレキシコン, **Paul Nation**; 大学のアカデミック・ワードリスト）は、実際の場面で使えないのでは習得にならないので、「学士力」に語彙（数）を明記する必要あり
- ・実際の場面という意味では、日常生活の英語力に上積みした形の「社会に必要な英語」（実践能力）を明記することも必要。
- ・統合を目指すには、そのための授業が必要で、たとえば「ゼミ」の利用が考えられる。
- ・統合を目指して、「知識→運用→知識→…」のサイクルを確立しなければならないが、レベルの設定も含め、適否を判断する客観的尺度の提示が難しい。
- ・知識・スキルの習得に関して「自己管理（力）」が重要。また、1コマの授業に求められる課外学習時間シラバス明記も求められる中、自立的な学習習慣をつけるための「Attitude 向上」は「学士力」に含めるべき。
- ・議論がカリキュラムポリシーと関わる領域に入るので、「教養として押さえなければなら

ない部分はここまで」、つまり **General English** に限定すべきではないか。

◆ 専門英語 (ESP) との関連

- ・ **General English** とともに、**ESP** 教育も必要で、両者をつなぐ **FD** が求められる。一方で、大規模大学では英語と専門の連携が難しいという現実がある。
- ・ 連携という意味では、「文系」、「理系」、「**General**」の区分で動けば歩み寄りも可能かも知れない。
- ・ 専門分野の教師が英語で授業をすると内容理解が低下する、逆に英語教員に専門コンテンツは扱えないという指摘あり。
- ・ コンテンツを扱う専門教員、英語 (のレトリック) を扱う英語教員というような棲み分けが必要で、さらに専門英語へバトンタッチするという流れも重要。
- ・ やはり専門との関係を入れると議論が拡散してしまうので、**General English** に限定すべきではないか。

◆ 「情報リテラシー」・「ライブラリーリテラシー」の扱い

- ・ 「情報リテラシー」や「ライブラリーリテラシー」は英語の「学士力」とは異質なものでないか。

◆ 「異文化理解」について

- ・ 言語を学ぶことによりみずからの言語や文化を内省することは **Critical Thinking** にも必要で、「学士力」として必要なのではないか。
- ・ 言語を通してみずからの言語や文化を考えることにこそ大学教育の意義があると思われるが、それは学生が「実体験」すれば良いことで、その知識を先回りして教えるというやり方はいかなものか。
- ・ 文化の発信やカルチャーショックの問題は、**General** などところの規定ができてからでよいのではないか？

◆ 「国際社会に参画する力」

- ・ 「国際情報社会に参画する力」は、**Attitude** の問題とも関連すると思われるが？
- ・ やろうと思ったことを実行できる能力の習得；生涯の目標をもって、手法・手段としての英語を身につける考え方も必要ではないか？
- ・ これを「学士力」に含めるには、測定する方法が問題となるが、欧州の「言語パスポート」が参考になるかも知れない。
- ・ 生涯にわたった目標設定では、賞味期限との関係が難しく、持続的な英語力の保証はないのではないか？
- ・ 英語そのものに絞り込むか、英語を手段として見るかによって、英語力の持続性の捉

え方は変わってくるだろう。

- ・スキルは測定しやすいが、測定できないところが重要。客観性が担保できれば、必ずしも数値化の必要はないのでは。

◆まとめ

今回の議論を通して、「学士力」に含めておきたい項目は以下の通り。

1. 知識としての英語
2. スキルおよび運用力としての英語
3. Attitude
4. 専門英語への橋渡し

◆宿題

今回の議論を踏まえて、委員長から文書を 23 日までに各委員に届ける。

特に、「学士力の到達度、能力判定、客観的測定法の方向性を示す。高大接続、社会接続の基準を設定」の項目を各自記入して、7 月 31 日を期限として提出されたい。

2. 今後のスケジュールについて

8 月 25 日/26 日で調整